

**■ PCN だより****PCN Volume 62, Number 3 の紹介 (その 2)**

先月号では、2008年6月発行のPCN Vol. 62, No. 3に掲載されている海外からの論文内容を紹介した。今回は日本国内からの論文について、著者をお願いして日本語抄録をいただき紹介する。

**Regular Article**

1. Burden and coping strategies in mothers of patients with schizophrenia in Japan  
*S. Hanzawa, G. Tanaka, H. Inadomi, M. Urata and Y. Ohta*

**日本の統合失調症患者を抱える母親の介護負担感と対処技能**

統合失調症患者と同居している母親57人の介護負担感に関連する要因を検討した。対象は長崎県精神障害者家族連合会会員で、主な調査項目は、介護負担感 (the 8-item short version of the Japanese version of the Zarit Caregiver Burden Interview: J-ZBI\_8)、全般的健康状態 (General Health Questionnaire 12-item version: GHQ12)、生活困難度、対処技能、情緒的支援、精神疾患・障害の理解度などであった。

患者および母親の属性のうち介護負担感に有意な関連をみた要因は、「介護代替者の有無」であった。用いられた評価尺度のうち介護負担感に有意な関連をみたのは、全般的健康状態、生活困難度、対処技能の総得点、下位尺度のうち「社会的関心」「威圧」「回避」「あきらめ」、精神疾患・障害の理解度であった。重回帰分析の結果、介護負担感に対して、対処技能の下位尺度である「社会的関心」及び「あきらめ」が他の要因と独立して有意な関連を認めた。

2. Prion disease causes less severe lesions in human hippocampus than other parts of brain  
*M. Kaneko, N. Sugiyama, D. Sasayama, K. Yamaoka, T. Miyakawa, K. Arima, K. Tsuchiya, K. Hasegawa, S. Washizuka, T. Hanihara, N. Amano*

**ヒトのプリオン病では海馬の障害が脳の他の部位に比べて少ない**

スクレイピー感染マウスなどの確立されたプリオン病動物モデルにおいて、海馬は非常に障害を受けやすい。その終末像では、CA1の錐体細胞は完全に脱落するが、ヒト剖検例における海馬病変の重症度について焦点を当てた研究はあまりみられない。本論文では、ヒトのプリオン病の海馬を神経病理所見やプリオン沈着の観点から検討することを目的とし、プリオン病23例の海馬について、領域ごとに神経病理学的に評価した。

その結果、海馬にはプリオン沈着は多くみられたが、嗅内皮質と比べて病変は明らかに軽度であった。支脚では高度であったが、CA1からは軽微になり、網状層 (stratum lacunosum) や分子層 (stratum moleculare) には海綿状変化がみられた。ヒトの海馬は、プリオン沈着による神経毒性の影響から防御されている可能性がある。

3. Classification of adult patients with type 2 diabetes using the Temperament and Character Inventory  
*N. Yoda, T. Yamashita, Y. Wada, M. Fukui, G. Hasegawa, N. Nakamura and K. Fukui*

### TCIを用いた2型成人糖尿病患者の類型化の試み

本研究の目的は、Temperament and Character Inventory (TCI) を用いて、2型成人糖尿病患者の類型化を試みることであり、得られた各類型の心理特徴から、より効果的と思われる治療アプローチを考察することが可能となる。対象は2型成人糖尿病患者の89人(男54人、女35人)で、方法としては対象者にTCI及び他の各種心理テストを施行してもらい、亜型分類の為にTCIのNovelty Seeking (NS: 新奇性追求)、Harm Avoidance (HA: 損害回避)、Reward Dependence (RD: 報酬依存)を変数としクラス分析を行った。解析の結果、2つのクラスが導かれた。クラス1はLowNS/HighHA/LowRDのパターンで、変化に抵抗感をもち協調性がない傾向があり、強迫的で意思を持った行動力が乏しく未熟な人格傾向が認められた。クラス2はHighNS/LowHA/HighRDのパターンで、社会的で他者に依存しやすく協調性があり、演技的で不安は少ない傾向であった。また、それぞれのクラスと血糖コントロールの関連では、クラス1ではHbA1cとTCIの下位項目「自己責任」に負の相関があり、HbA1cとSTAIの「状態不安」に正相関が認められた。クラス2ではHbA1cとTCIの下位項目「不確実性に対する恐れ」に正の相関が認められた。本研究の結論として、2型成人糖尿病患者はTCIを用いた心理特性の解析にて2つのサブグループに分類され、これら2つのグループは心理特性が異なり、血糖コントロールとの相関も異なるパターンとなることが示された。

4. The relationship between patient characteristics and psychiatric day care outcomes in schizophrenic patients

S. Miyaji, K. Yamamoto, N. Morita, T. Tsubouchi, S. Hoshino, H. Yamamoto, Y. Sakai, K. Tanaka and H. Miyaoka

### 統合失調症デイケア通所患者の臨床的特徴と転帰との関連について

【目的】 統合失調症デイケア通所患者の臨床的特徴と転帰との関連を明らかにするために調査を行った。

【方法】 北里大学東病院デイケアに通所歴がある統合失調症患者430例を対象とし、後方視的に調査を行った。デイケアの転帰を①パートタイムジョブ、②精神障害者小規模作業所への通所、③就職・復職(家業も含める)、④進学・復学、⑤精神症状の増悪による中断、⑥精神症状の増悪による入院、⑦その他(転居や通所距離などの問題による他のデイケアへの異動など)に分類し、①②③④を終了群、⑤⑥を中断群とした。これら2群の年齢、性別、発症年齢、入院回数と入院期間、同居人数、学歴、職業歴、結婚歴、抗精神病薬chlorpromazine換算量について比較検討を行い、有意差が認められた臨床的特徴について、転帰(終了/中断)を目的変数としたロジスティック回帰分析を行った。

【結果】 デイケア治療の転帰と統計学的に有意に関連が認められた臨床的特徴は、発症年齢(OR 1.10; 95% CI 1.04-1.17)、入院回数(OR 0.77; 95% CI 0.62-0.96)であった。学歴(大学卒業)については、統計学的有意差は認められなかったが、関連がある傾向(OR 1.78; 95% CI 0.97-3.27)があった。

【考察】 今回の調査から高い発症年齢、少ない入院回数は、デイケア治療の良好な転帰と関連があると考えられた。また高学歴については関連がある傾向があると考えられた。デイケアの治療効率を上げていくためには、治療開始時から、個々の患者に合った対応や支援、プログラムを構成することが大切であるが、そのためにはこれらの転帰に関連する臨床的特徴を明らかにしていくことが重要と考えられた。

5. Predictors of antidepressant response to fluvoxamine obtained using the three-factor structures of the Montgomery and Asberg

Depression Rating Scale for major depressive disorders in Japanese patients

*H. Higuchi, K. Sato, K. Yoshida, H. Takahashi, M. Kamata, K. Otani and N. Yamaguchi*

日本人大うつ病患者における、モントゴメリーとオスバーグのうつ病評価スケールの3因子モデルに基づくフルボキサミンの反応予測因子

フルボキサミンは選択的セロトニン再取り込み阻害薬であり、大うつ病患者の治療に広く用いられている。フルボキサミンの症候学的治療反応予測因子についてはこれまで検討されてこなかった。

DSM-IVで大うつ病の診断基準を満たし、モントゴメリーとオスバーグのうつ病評価スケール(MADRS)の点数が、21点以上の100人の日本人うつ病患者を対象に研究を行った。最終的に81名が解析対象となった。MADRSの点数が31点以上の患者を重症(32名)、それ以外を非重症(49名)と定義した。解析にはMADRS 3因子モデルを用いた。第1因子は3項目、第2因子は4項目、第3因子は3項目より成るが、それぞれ不快気分(dysphoria)、遅滞(retardation)、植物機能症状(vegetative symptoms)を表している。フルボキサミンは100~200 mg(2分服)を合計6週間投与した。

結果として、非重症患者における治療前の第3因子得点の平均値は、非反応者では反応者と比較して有意に高かった。さらにこの有意差は1週目以降も持続していた。また、重症患者における反応率は75%であり、非重症患者の反応率(65.3%)よりも高かった。この研究結果から、非重症患者においては、治療前の第3因子得点の低値はフルボキサミンの治療反応性の予測因子となることが示唆された。重症患者に対するフルボキサミンの著明な効果も合わせて確認できた。

6. Cognitive-behavior therapy for Japanese patients with panic disorder: Acute phase and one-year follow-up results

*Y. Nakano, K. Lee, Y. Noda, S. Ogawa, Y.*

*Kinoshita, T. Funayama, N. Watanabe, J. Chen, Y. Noguchi and T. A. Furukawa*

国内のパニック障害患者への認知行動療法：急性期と1年後追跡の結果

【目的】 国内のパニック障害患者へ認知行動療法プログラムを施行したので、その結果と追跡データの結果を報告し、治療結果のベースライン予測因子を分析する。

【方法】 広場恐怖がある/ないパニック障害の外来患者70名を、マニュアルを用いた認知行動グループ療法で治療した。

【結果】 14名(20%)の患者が治療から脱落した。治療を最後まで受けた者について、パニック障害重症度尺度の平均値は、ベースライン12.8点から、治療後7.1点へ減少した(44.7%減少)。この治療効果は、1年間持続した。ベースラインの重症度でコントロールした場合、治療効果の予測因子として、罹病期間とベースラインの社会的機能不全が挙げられた。

【結論】 我々のデータにより、日本人のパニック障害に対するグループ認知行動療法は、西洋における同疾患患者を対象とした場合と同様、症状改善をもたらすことが示唆された。

7. Anterior cingulate cortex volume reduction in patients with panic disorder

*T. Asami, F. Hayano, M. Nakamura, H. Yamasue, K. Uehara, T. Otsuka, T. Roppongi, N. Nishishi, T. Inoue and Y. Hirayasu*

パニック障害における前部帯状回容積の減少

【目的】 近年の神経画像研究の成果により、前部帯状回(ACC)がパニック障害の病態に重要な役割を担っている事が示唆されてきた。多くの脳機能画像研究において、ACCとパニック障害やその症状、パニック障害に関連した情動課題との密接な関連が示されている。しかしながら、ACCの構造変化を示した報告はない。

【方法】 26例のパニック障害群と、年齢・性

別を一致させた26例の健常群の脳MRI画像を用いて、関心領域法 (ROI) と自動解析法である optimized voxel-based morphometry (VBM) を行い、ACCの構造変化について検討した。ROI法では、ACCを4つの小領域 (背側部・吻側部・脳梁下部・膝下部) に分け比較した。

【結果】 健常群と比べパニック障害群において、ROI法では右側背側部領域に、VBM法では右側背側部と吻側部の一部にまたがった領域に有意な容積減少を認めた。

【結語】 ROI法とVBM法の両者において、パニック障害群での領域特異的なACCの容積減少が示された。ACCの機能異常のみならず、構造異常もパニック障害の病態に関与している事が示唆された。

### Short Communication

1. Development of the Nurse Attitude Scale short form: Factor analysis in a large sample of Japanese psychiatric clinical staff

*F. Katsuki, S. Fukui, N. Niekawa, I. Oshima, N. Setoya, S. Ninomiya, A. Moriyama, T. Uchino, J. Ito and K. Tsukada*

**Nurse Attitude Scale (NAS) 短縮版の作成：日本の精神科臨床スタッフの大量データを用いた因子分析から**

Nurse Attitude Scale (NAS) は看護師の感情表出を測定するものとして開発されたものである。今回NAS短縮版を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行った。日本の精神科臨床スタッフの1252人のデータをもとに、NAS短縮版の因子分析を行った結果、3つの因子が抽出された。それぞれの下位尺度に対するCronbach' $\alpha$ の値は、「敵意」は0.852、「批判」は0.846、そして「肯定的言辭」は0.645であった。また、NAS短縮版の各下位尺度とMaslach Burnout Inventoryの関連のある各下位尺度との間には有意な相関がみられた ( $P < 0.001$ )。以上のことからNAS短縮版は十分な信頼性と妥当性があることが示唆さ

れた。

2. Trait aggression in suicide attempters: A pilot study

*C. Doihara, C. Kawanishi, T. Yamada, R. Sato, H. Hasegawa, T. Furuno, M. Nakagawa and Y. Hirayasu*

**自殺企図者の特性としての攻撃性：予備的研究**

自殺企図 (未遂) は、自殺の重要な危険因子である。自殺企図者の心理学的特性を理解することは、自殺企図後の治療や企図再発予防にとって重要である。著者らは、日本において救命救急センターで入院治療を受けた、特に身体的に重症の自殺未遂者の攻撃性について調査した。

対象は自殺未遂者群55人 (男性22人、女性33人) と健常者コントロール群71人 (男性20人、女性51人) で、日本語版Buss-Perry攻撃性質問紙 (Buss-Perry Aggression Questionnaire: BAQ) を用いて攻撃性 (trait aggression) を評価した。

結果として、BAQの合計得点 ( $t = 2.782$ ,  $P = 0.006$ ) と、下位項目である敵意についての得点 ( $t = 3.735$ ,  $P < 0.001$ ) が、自殺未遂者群のほうが健常者コントロール群より有意に高値であった。

本研究において、自殺企図行動と攻撃性の関連が認められたが、自殺予防のためには、攻撃性とそのマネジメントに焦点を当てることが重要な点の一つであると考えられた。

3. Analgesia during self-cutting: Clinical implications and the association with suicidal ideation

*T. Matsumoto, F. Imamura, Y. Chiba, Y. Katsumata, M. Kitani and T. Takeshima*

**自己切傷行為中の痛覚脱失：その臨床的意義、ならびに自殺念慮との関係**

本研究では、少年鑑別所・少年院入所者サンプルを用いて、自己切傷経験者における自己切傷の

臨床的様態と自殺念慮との関係について検討した。多変量解析の結果、自殺念慮の経験と有意に密接な関係にあった変数は、自己切傷をする者が男性であること、および、自己切傷中に痛みを感じないことであった。この結果から、自己切傷をする者における自殺のハイリスク群の臨床的特徴は、男性であり、かつ自己切傷中に痛覚を脱失していることと考えられた。

#### 4. Two cases of burning mouth syndrome treated with olanzapine

*N. Ueda, Y. Kodama, H. Hori, W. Umene, A. Sugita, H. Nakano, R. Yoshimura and J. Nakamura*

#### **Burning mouth 症候群（身体表現性障害）にオランザピンが有効であった2例**

身体表現性障害の1種である burning mouth 症候群にオランザピンが有効であった2例を報告する。

症例1：54歳の女性。Burning mouth 症候群（身体表現性障害）に対してミルナシプランを投与されていたが効果がなかった。オランザピン 2.5 mg/day を追加したところ症状が劇的に改善した。その後ミルナシプランを中止したが病状は安定したままであった。

症例2：51歳の男性。Burning mouth 症候群（身体表現性障害）に対してパロキセチンを投与

されていたが効果がなかった。オランザピン 2.5 mg/day を追加し、1週間後に 5.0 mg/day に増量した。その後症状は徐々に減弱し、安定して生活できるようになった。

これらの症例から、オランザピンが burning mouth 症候群（身体表現性障害）に有効である可能性が示唆される。

#### 5. Prevalences of lifetime histories of self-cutting and suicidal ideation in Japanese adolescents: Differences by age

*T. Matsumoto, F. Imamura, Y. Chiba, Y. Katsumata, M. Kitani and T. Takeshima*

#### **日本の若年者における自己切傷と自殺念慮の生涯経験率：年代による推移**

我々は、日本の中学生・高校生における自己切傷と自殺念慮の生涯経験率が年代によってどのように異なっているのを検討した。中高生における自己切傷の生涯経験率は全体で9.9%、自殺念慮の経験率は40.4%であった。また、十代前半では、自殺念慮を抱いた経験は女性の方が男性よりも高率である一方で、自己切傷の経験率には男女間で差がなかった。一方、十代後半では、自殺念慮の経験率には男女間で差がなかったが、自己切傷の経験は女性の方が高率であった。

（文責：武田雅俊 PCN 編集委員長）